

全力をふりしぼった最後の演説

森 美 夫

私と大平さんとの交友は、先生が池田内閣の外務大臣を辞められた直後から始まったので、もつかれこれ十五、六年になる。当時から日曜日といえはよく茅ヶ崎のスリーハンドレッドクラブへきておられたが、顔を合せると必ず先方から軽く会釈をされた。大臣の経験者にしては腰の低い人だと思って、何時とはなく好感を持つようになった。それがある日クラブのコンペで二人が勝ち残って決勝を争うことになった。幸い試合は私が勝ったが、先生の人柄にすっかり敬服させられてしまった。それがご縁で、その後先生からよくゴルフのお誘いの電話を受けた。先生も私もハンデは同じ十八で終生スクラッチで終ったことになる。だがベットはいくらか私の方が負け越したようである。二、三千円も私から取ると、「今日はこれで日当になった」といって子供のように喜ばれた。総理になつてからも、二十回ゴルフをされた中で十二回までは私が一緒だったそうである。それは私が政治や仕事など面倒なお話をしないので、気兼ねなくのんびりと遊ばれたからではないかと思われる。

先生はこよなくゴルフを愛された。どんな忙しい時でも日曜日にはゴルフに出掛けられたし、一度コースに出た以上、途中で雨が降っても風が吹いても絶対に引き揚げようとはされなかった。一昨年の夏箱根でプレーしている時、すこいにわか雨に遭ってコースにほとんど人影が見えなくなったが、それでも先生は止めようとはいわれなかった。そのうちに雨の方が根気負けしたのか何時の間にか止んで、晴れ間が出てきたことがある。

ある日、田中さんが総理をしておられた時、三人でスリーハンドレッドでプレーしたことがある。春のうらら

かな日光を浴びて人の気持もうきうきしていた。すると田中さんが「いい気持だなあ。それにしても僕達田舎者はいいなあ」といわれた。すると大平さんが「田舎者といつても僕はおんば日傘で育つて、学習院大学の四国分校を卒業したんだからね、ちょっと君とは生まれが違うよ」といった。すると田中さんがいかにも不思議そうな顔をして「そうかなあ、そんなことは初めて聞いたが、それにしても君の顔はどう見てもおんば日傘育ちとは見えないがなあ」といつて、みんなで腹をかかえて笑ったことがあった。思えば楽しい頃であった。

五月三十日参議院選挙が始まった日の夕刻、先生は横浜駅西口へ応援にこられた。私が面会に行くと、乗用車の中で一人で休んでおられた先生は、久し振りに私の顔を見て「今、君の建っているホテルはどこかと探していたんだよ」といつて、にっこり笑つて白い手袋をした手を差し出してくれた。だがその手は手袋ごしとはいえ冷たい力のない手であつた。「余りご無理をしないで下さい」といつと「うむ、少し疲れたなあ、だがすぐ回復するよ」といわれたが、私には何だかただごとでないように思われた。そこへ秘書が呼び出しにきて、先生は重い足を引きずつて演壇に上つて行つた。だが、壇上に上つた先生は別人のように全身の力を振り絞つて大衆に呼びかけた。演説は三十分以上続いた。それは全生命を焼き尽した名演説であつた。四千人に余る聴衆は身動きもしないで聴き入つた。そして演説が終つたとき万雷の拍手が起こつて、しばらくは鳴り止まなかつた。その夜、先生が自宅で倒られたことは余りにも劇的であつた。

生前先生は「政治はダーティなものだ。人を信頼することができない。僕は七十歳になつたら政治をよすから、君も仕事を止めて一緒にゴルフをして楽しく暮らそうよ」とよくいつておられた。それにしても人生の齒車はどこで狂つてきたものか、奇しくも七十歳で、しかもこんな状態で政治に終りを告げようとは夢にも思わなかつた。先生のご冥福を心からお祈りするものである。